
「先輩、あのね。～tearlove～」

R i n ♪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「先輩、あのね。〈tear love〉」

【Nコード】

N4291Z

【作者名】

R i n ♪

【あらすじ】

「この恋は絶対に叶わない・・・。」

彼女がいる先輩を好きになってしまった美香。

好きなのに近づけない。。。、

好きなのに、想いを伝えられない・・・。

そんな切なく苦しい恋をする美香の想いに、

美香のクラスメイト・匠が気づき・・・。

彼女がいる先輩を想う美香。

美香に好きな相手がいても、守ろうとする匠・・・。

4人の複雑な恋が、時には離れ、時には絡み合う・・・。

叶わない恋

〈第1話〉

先輩、あのね。

好きです、大好きです。

先輩は明るくて、気さくで、こんな私にも優しくしてくれて。

先輩を見てるだけで、胸がきゅうつとしめつけられて、ドキドキするんです。

…だけど、私がいくら先輩を想っても、この恋が叶うことはないんです。

誰よりも、先輩のことが好きなのに…。

私の初恋は、絶対に叶うことのない、つらい恋なんだ…。

*

ピーーーー！

「試合終了ー！」

試合終了の笛が鳴ったと同時に、体育館に歓声が響きわたった。

「やったー！」

私も嬉しくて、思わず、立ち上がってしまった。

「ナイス、皇！」

「最高！」

「皆のおかげだつて！」

コートの中で、皆に囲まれてるのは、長谷川皇先輩。同じ高校の2年生。

バスケット部のエースで、明るくて、気さくで、皆に人気がある。

…そして、私の好きな人。

「皇っ、お疲れ様！」

走りながらコートの中に入ってくる、女の人。

「夏希！」

先輩とその人が、ハイタッチしてる。私はそれを、悲しそうに笑いながら見つめていた。

私、桜木美香、高校1年生は、皇先輩に恋をしている。

先輩は、私の初恋なんだ。

…だけど、先輩には彼女がいる。

その彼女は、今、皇先輩と楽しそうに話してる、篠原夏希先輩。

夏希先輩は、皇先輩と同じ2年生で、生徒会の副会長さん。

美人で頭よくて、気取らなくて…、誰にでも優しい、
皆の、憧れの先輩…。

「いいなあ…、夏希先輩は。」

私は、きゅうつとしめつけられる胸をおさえながら、そう呟いた。

…私と先輩が、初めて会ったのは、雨の日だった。

その日私は、受験会場に行く途中で、でもコケて怪我して、傘も壊れちゃって…。

道端にうずくまっていた。

「（どうしよう、このままじゃ遅れちゃう…!）」

その時、

「君、大丈夫？」

…困ってた私に、1番に声をかけてくれたのが、先輩だった。

「あ…、ちょっとコケちゃって」「そうなの？あつ、もしかして君、
受験生？」

「あ、はい。」

「そこの東高校？」

「そうです。」

先輩は時計を見ると、私の顔をジッと見つめた。

「…少しだけ、我慢してて。」

小さな声で、そう呟いた先輩は、私を抱きかかえた。

「え…。」

「すぐ着くから！」

そう言って先輩は、私を東高校まで送ってくれた。

…ねえ、知ってる？先輩。

私にはその時、先輩がすつごく、キラキラして見えたの。

皆通りすぎてく中で、先輩だけが声をかけてくれた。

後から知ったけど、その日先輩には大事な試合があつて、先輩も遅刻しそうだったのに、私のけがの消毒までしてくれた。

優しくて、キラキラしてて…。

そんな先輩に恋をした。

なのに、彼女がいるなんて、知らなかったよ。

あんなにキレイな彼女さんに、私勝てないよ。

…もう、好きになっちゃったのに…。

けどやっぱり、先輩のこと諦められなくて、先輩が入ってるバス
ケ部のマネージャーになった。

先輩は私のことを、ただのマネージャーとしか、見てない。

そんなことわかってる。

…だけど、そばにいたい。

先輩に、見てもらえなくても、好きになってももらえなくてもいい。

ただ、そばにいたいだけなんだよ…。

大粒の涙

〈第2話〉

キンコンカンコン…。

「美香、次、教室移動だよ！」

「あ、うん！」

3時限目の終わり。

私は教科書をそろえ、友達と一緒に教室を出た。

廊下を歩いていると、

「あつ、ねえ美香！」

「なに？」

「ほら、そこ！」

友達が、窓の外を指さしている。そこには…、

「ほら、匠くん（ ” ” ）」

木にもたれかかって読書をしている、伊藤匠くんがいた。

匠くんは、私のクラスメイト。だけど、しゃべったことないや。

クールで、授業出ないのに頭よくて、先生たちもなにも言えない感じの人。

けっこつ、女子からは人気らしいんだけど…。

「匠くんさー、かっこいいよねー（ ” ” ）」

「そうかなー？」

「えー。美香、匠くんのこと、かっこいいと思わないの？」

「んー。別に…。」

確かに匠くんは、人を寄せつけない独特の雰囲気を持つてる。

女子からクッキーとか、絶対にもらわないんだろっな（〇く――

気づかれた恋心

〈第3話〉

ダン、ダン、ダン！

「皇、パス！」

「入れる皇！」

「おっしやー！」

次の瞬間、先輩がふわりと宙に飛び上がり、ダンクシュートを決めた。

「わあ…！先輩すごい！」

私はバスケットボールを磨いている手を止め、つい先輩に見いつてしまった。

「（本当に、キラキラしててかつこいいなあ…。）」

私がバスケ部のマネージャーになって、3ヶ月。

先輩がバスケ部に入ってるってわかって、どうしてもマネージャーになりたくて、友達と一緒に頼みにいってもらったんだっけ。

入ったばかりの時はちょっと不安だったけど、やっぱり入ってよかったな…。

部活は、私が先輩を見つめてられる唯一の時間。

他は、ずっと夏希先輩と一緒にいるから……。

その時、

「おーい、桜木！」

「（えっ！？）」

私がバツと顔を上げると、そこには皇先輩と夏希先輩が…。

「ど、どうしたんですか？」

「なんかね、皇がさっきシユートした時、ひざぶつけちゃったみたいで…。」

夏希先輩が、少し呆れぎみに言った。

「桜木さん、手当てしてあげてくれる？私、ちょっと今、手が離せなくて。」

「あ、はい！」

鼓動がはやりだした。

私にとっては、願ったり叶ったりだし！

「い、今手当てしますね！」

私は、消毒液を握る手が、震えてることに気づいた。
でも怖い震えじゃなくて、緊張の震え…。

私は、深呼吸をし、落ち着かせてから、消毒液をふくんだティッシュを、先輩のひざに当てた。

「うわ、しびれるー。」

「い、痛くないですか？＝」

「平気だよ＝」

「あ、はい！」

ひざに当てていたティッシュを、もう一度ひざにギュッと押しつけ、

離れた。

「今ばんそうこう貼ります！」

と、勢いよく立ち上がった瞬間、床のティッシュに足をすべらせ、私は後ろ向きに倒れた。

「っわっ！」

「！！桜木、危ない！」

どっしーん！という派手な音に、体育館にいる全員が振り向いた。

私は、転んだのに痛くないことに、頭に？マークを浮かべていた。が、後ろを見ると、そこには痛そうに顔をしかめている先輩が…。

「せ、先輩！すみません！」

よりによって先輩にけがさせちゃうなんて…！

私の顔が真っ青になった。

「大丈夫ですか？」

私先輩の腕を掴もうとすると、先輩がいきなり立ち上がった。

そして、私に二カッとした笑顔を見せた。

「オレは大丈夫！頑丈なんだよ！てかそれより、桜木大丈夫か？どこか痛いところない？」

ドキン…。

先輩、自分もけがしてるのに、真っ先に私の心配してくれるなんて…。

「…先輩は、優しすぎます。」

「…え？」

言い終わってから私は、ハッとした。

どうしよう、いきなりこんなこと言って変だと思われないかな…。

「あ、あの…。」

「…すげー、びっくりした。」

「え…?」

私が顔を上げると、先輩が、照れたような、嬉しそうな顔をしていた。

「いやオレさ、ずっと桜木に、なんか…、恐がられてる? つつーか嫌われてんのかなって…。」

「え!? 何ですか!?!」

「だって桜木、いつもオレと目があうと、顔そらすだろ?」

「そ、それは…。」

恥ずかしかったから
なんですが…。

「だからさ、嫌われてるのかなって。」

…私、そんな風に思われてたんだ…。

どうしよう…、

誤解ときたいよ…!

「…き、嫌いじゃないです。」

「え…?」

私は必死に先輩に伝えた。

「せ、先輩のこと、嫌いじゃないです…。ただ、うまく話しかけれなくて…。」

私はバツと頭を下げた。

「誤解させてしまったなら、ごめんなさい！」

しばらくの沈黙が続いた。

先輩、引いちゃったのかな…。

でも、誤解されるよりはいい…。

とその時、私の頭に、温もりがある先輩の手がおかれた。
優しくてあたたかい手…。

「ありがと、桜木。」

「先輩…？」

「桜木の気持ち、ちゃんと伝わった。ありがとな…！」

「っはい…！」

先輩、大好きです。

あなたのその、優しくて、輝いた笑顔は、皆を幸せにする。

…私、先輩を好きになって

本当によかった…。

「ヤバい！遅くなっちゃった！」私は部活の成績表を持ち、教室へ戻ってきた。

窓の外はもう真っ暗で、風がヒューヒューと音を立てていた。

「早く帰んなきゃ！」

カバンを取り、帰る支度をしていたその時、

「ちょっと待てよ。」

え…？

私がゆつくりと教室のドアを開けると…、

「た、匠くん…。」

「ちょっと話があるんだけど。」

私に話…？

私、何かしたっけ…。

「あの、なんの用で…。」

「あんた、2年の長谷川皇のこと好きだろ？」

「…え…？」

いきなり匠くんの口から飛び出した衝撃的な言葉。

私はその場から動けなかった。

窓の外では、一段と風がゴウゴウとうねりをあげていた…。

04 まさかのデート

〈第4話〉

「あんだ、2年の長谷川皇のこと好きだろ？」

匠くんの言葉と視線に、私は足が動かなかった。

そしてやっと言葉を絞りだし…。「なんのことですか？別に好きじゃないです。」

「ウソ。…さっき見てたんだぞ。体育館であんだと長谷川が話してる。」

ぎくつと、私はまばたきを何回かした。

「だって私、マネージャーですから。マネージャーと部員が話してちやおかしいですか？」

「…長谷川はあんだのこと、ただのマネージャーとしか見てないだろうけど。あんだは長谷川をただの部員としてじゃなく、特別だと思ってる。」

「なんでそんなこと…。」

「見りゃわかるよ。だってあんだ、長谷川と話するとき、めっちゃ嬉しそうな顔してるし。」

「なっ…、」

言葉とは反対に、私の頬はどんどん紅色に染まっていた。

「ほら、やつぱり。」

「っ…。…どうするんですか。バラすんですか？それとも…。お、脅すんですか？」

私が言うと、匠くんがかすかに笑った。

「バラしも脅しもしないよ。…ただ、協力してあげようかって。」

「…はい？」

予想もしてなかった言葉に、私は啞然とした。
協力？なんで匠くんが！？

「え、なんで…。」

「そんなに警戒しないで。ただ単純に協力したいだけだから。」

「だけど、喋ったこともないのに…。協力する理由が無いじゃないですか。」

「…ま、理由なんかどうでもいいじゃん。あんたは協力してもらったら結果的にプラスなんだから。じゃあね。」

「あ、ちよつと…。」

匠くんは、1度ニヤリと、不適な笑みを浮かべ、教室から出ていった。

「な、意味わかんない…。」

私は自分の机の脇に、ペタンと座りこんでいた…。

ソーツ……

「（よし、匠くん、まだ来てない…。）」

私は教室のドアの脇から、中を覗きこんだ。まだ、匠くんの姿はな

く、教室はいつものように、賑やかだった。

「ふー、よかった。さ、行こ！」と、私が教室に入ろうとしたその時、

「おはよ。」

私の肩をポンと、匠くんがたたいた。

「た、匠くん…。」

「なにやってんの？」

何、このあやしい笑顔…。

絶対になんか企んでるよ！

「おはよう。なにか用ですか？」「ん…、別になんでもないけど。てかさ、その堅苦しい敬語やめろよ。クラスメイトなんだし。」

「……わかった。」

フ…と匠くんが、「いい子。」と優しそうに笑った。

この人、こんな顔もするんだ…。なんか、クールなイメージしかなかったから意外…。

「ほら、教室行くぞ。」

「あ、あ、うん！」

ガラガラガラ！っという、かなりの大きなドアを開ける音に、教室が静まった。

「なんで匠ちゃんと桜木さんが？」「変な組み合わせ…。」

ヒソヒソと女子たちがささやきあっている。

こういう空気、苦手だな…。

私が少しオドオドしていると、それに気付いたのか、私の背中を匠くんが軽く押した。

「わっ…。」

その弾みで、私は自然に教室に入ることができ、クラスの雰囲気もだんだんとにぎやかになった。

「ちよっ、美香、なんで匠くんと一緒だったの!？」

机につくなり、私に質問をしてくる友達の小春に、私は、さあ？と首かしげをした。

「私もよくわかんない…。」

…あの人、本当なんのつもりで私に構ってくるんだろ…。

やっぱりからかわれてる…？

…でも、皇先輩を好きってことがバレちゃってる以上、協力してもらうしかないのかな…。

フーッと私が浅いため息をつくと、廊下側の窓がコンコンとたたかれた。

「ん？」

見てみると…、

「!!、皇先輩!」

「おっはー、桜木。」

「ど、どうしたんですか？わざわざ1年のクラスに…。」

先輩が入ってきたとたん、女子が一斉に振り向いた。

先輩、モテモテだからなあ…。

「ちょっと桜木に頼みごとがあつてさ…。」

「は、はい、なんでしょう…、」
とその時、

「長谷川先輩。」

こ、この声は…。

私が振り向くと、やっぱり…。

そこにはニヤニヤしている匠くんがいた。

「あれ、君…。」

「1年の伊藤匠です。桜木になにか用ですか？」

「あ、もしかして、桜木の彼氏なの？」

「なっ、ち、違います！ただのクラスメイトです！」

先輩だけには誤解されたくない！私は声が裏返ってることにも気づかず、つい力説してしまった。

「あ、彼氏じゃないの？」

「全然違います！と、ところで頼みごとってなんですか？」

「あ、そうそう！」

先輩が、ニツコリと私に笑いかけ、手をポンとたたいた。

「実はさあ、もうすぐ夏希が誕生日なんだ。」

「そうなんですか？」

「…なんだけど、オレ女子になにあげたらいいかわかんなくて…。だから、桜木に聞こうかと…。」

夏希先輩、誕生日なんだ…。

少しだけ、胸がズキンと痛んだ。だけど…。

「私でよかったら、協力しますから。」

私は笑顔をつくった。

「本当か、桜木！やった！」

…先輩の笑顔が見たいから…。

「じゃあ、なにから…。」

「どうせなんだから、一緒に買い物行ってきたら？」

間で話を聞いていた匠くんが、私と先輩の顔を交互に見ながら、言った。

意地の悪そうな、ニツコリとした顔で。

「な、なにいつて…。」

「いいじゃん。一緒に言った方がわかりやすいし。どうですか、長谷川先輩？」

「おう！そうだな。一緒に行った方がわかりやすいな！桜木、今日放課後あいてる？」

「あ、はい！」

「じゃあ決まりだな！」

ええ…！

本当に！？

私と先輩が…！？

「デートだな。」

耳元でそつとささやかれた匠くんの言葉…。

まさかの、先輩とのデートの
始まりです！！

「好きだから」なんて言えない・・・

〈第5話〉

――放課後――

ついに先輩とのデート…。

私はドキドキしながら、校門の前に立っていた。

…なんか、こうして先輩を待っていると、一瞬だけど、彼女になった気分…。

「桜木！」

聞き慣れた声に私は我にかえり、顔を上げた。

「先輩！」

「遅れてごめんな。」

「いえ、私も今来たので、大丈夫です！」

先輩が優しく笑い、「そつか。」と呟く。

こんな少しのやりとりでも、私は嬉しくてたまらなかった。

「よろしくな、桜木。じゃ、まずどこ行く？」

「そうですねー。夏希先輩って、どういう物が好きなんですか？」

「んー、ストラップとかはよくつけてるけど…。」

「ストラップ…ですかぁ。」

私はお気に入りの雑貨屋さんや、ショッピングモールを、先輩と回った。

途中、人波にはぐれそうになった私の手を、先輩が握りしめてくれて、顔が火照ってしまった。

「うーん、中々、いいのですね…。」

「そうだなー。」

そう言うと先輩は、落ち込んだように深いため息をついた。

「先輩…？」

「…なんかシヨックだなんて…。オレ、夏希の好きなものも知らないとかダサすぎる…。夏希の彼氏なのにな…。」

「夏希の彼氏」

その言葉に、私は胸が、針で刺されたようにズキンと痛んだ。

皇先輩が、夏希先輩をすごく大事に思ってることは、よくわかってる。

私は、そういう、先輩の優しいところを好きになったから…。

私は、手の平をギュッと握りしめた。

「…ダサくなんかいいです。」

「…え…。」

「先輩は、すぐくすぐくすぐく、夏希先輩のことを考えてるじゃないですか。先輩は、人のことで一生懸命になれる人です。」

…その一生懸命な先輩は、ダサくなんかいいです。」

…初めて、先輩の目を真っ直ぐ見ることが出来た。

私は一体今、どんな顔をしていてどんな目をしているんだろう…。驚いて、目を丸くしている先輩の顔しか見えなかった。

「…変なこと言ってますみません、先輩。行きましょうか。」

私が後ろを向いたその時、私の右腕が、がっしりとした、だけど優しい、先輩の手につかまれた。

私は、先輩の方を向かなかった。

「…どうしたんですか？先輩。」「…桜木てさ、どうしていつも、オレのこと、そんな良く言ってくれるの…？オレ、そんないいやツじゃないよ。」

…先輩、それはね。

先輩のことが大好きだからだよ。

先輩の良いところ、いっぱい、

知ってるからだよ…。

だけど…、そんなこと言えない。

「好きだから」なんて、

言えるわけがない…。

「…本当のこと、言っただけですよ…。」

…だけど…、

「好きだから」なんて

言わないから。

この想いは、胸の奥深くに、
閉まっておくから。

…せめて、これだけは
言わせてください…。

「私にとって、先輩は…、
とても大切な人なんです…。」

無理やりに、笑顔を作る。

心配させたくないから。

…先輩は、私がそう言った意味を聞かなかった。

ただただ、見たことのないほど、真っ直ぐな瞳で。

私を見つめていた…。

結局、私と先輩は、恋人用のペアで売ってるハートのストラップを
選んだ。

ストラップを買うときの、嬉しそうな先輩の顔を見て、初めて、先
輩に恋したことを憎んだ。

…先輩を、好きになってしまった自分を憎んだ…。

臆病な私

〈第6話〉

デートの翌日の朝。

先輩から、

「昨日はありがとう。」って、メールが届いてた。

いつもは嬉しいはずの先輩からのメールも、今は…、

色あせていて、虚しかった。

学校についた私は、なんとなく、匠くんがいる裏庭の方へ、向かってしまった。

匠くんがいつもいる、ソメイヨシノの木…。

今は、冬の寒さで、枯れ葉になってしまっている。

なんとなく、私と似てる感じがした。

「…匠くん。」

私の声に、読んでいた本の上から、匠くんが顔を出した。

「桜木…。びつくりした。」

と、不意に涙が、ポロポロと頬を伝ってきた。

「え…、ちょ、桜木…。」

私が泣いている理由を知らない匠くんは、目の前で戸惑っていた。

「…匠くん、ごめん…。」

「え、いきなりなにが…。」

「…せっかく、匠くんが、先輩とデートさせてくれたのに…。私、何も出来なかった…。チャンスだったのに…。しかも、先輩のこと困らせちゃって…。」

…こんなこと、匠くんに言ってもしょうがないってわかってる。

だけど、誰かに話さなきゃ、悲しさで、切なさで、苦しさで、心が破裂しそうだった。

「桜木…。」

ごめんね、匠くん。

泣いたりして…。

匠くん、困るよね…。

そう思うのに、涙が止まらなかった。

「桜木…。…大丈夫だ。」

そう言って、匠くんは、しゃがみこんでいる私の頭を、優しく、撫でた。

とても、あたたかくて優しい、いつもの匠くんからは想像できないほどの、安心感があった。

「っありがとう、匠くん…。」

…夢に見た、先輩とのデート。

大好きな人とデートするって、どんな感じだろうって、ずっと憧れてた。

だから、何度も、何度も、何度も、夏希先輩になりたいと思った。

先輩に愛されてて、大切にされてて、ずっとそばにいられる夏希先輩が、悔しいくらいに、羨ましくて…。

だけど、もし私が夏希先輩だったとしても、皇先輩との恋愛なんて無理だったかもしれない…。

こんな、臆病で、自分の気持ちさえ伝えられない。

…臆病な私。

変わりたいよ…。

「…匠くん、どうやってら変われるのかなあ…。もう、こんな臆病で素直じゃない自分やだよ…。」

泣いて、もうなにがなんだかわからなくなってる私の肩をつかみ、匠くんは真っ直ぐな目で、私を見た。

そして、優しい声で呟く。

「…無理して変わる必要は、ないだろ…。」

「…え？」

いつになく真剣な瞳に、吸い込まれてしまいそうで、少しだけ目をそらした。

「誰だって恋愛で傷つきたくないから、どうしても臆病になる。桜木だけじゃないだろ。それに、素直じゃなくても、桜木にはいい良いところあんじゃん。」

いつもポーカーフエイスな匠くんが、顔を真っ赤にしている。

励まそうとしてくれていることが、痛いほど、伝わってきた。

「うまく言えないけど、オレは今のままの桜木が、一番いいと思うから。だから、変わる必要なんて、ないだろ。」

今の私には、残酷すぎるくらいに優しい言葉だった。

胸の奥に、匠くんの言葉がジンと響き、私はプツリとなにかの糸が切れたように、

…号泣してしまった。

頬を伝う、大粒の涙。

それは全部、匠くんのあたたかくて優しい腕のなかに、吸い込まれていった。

…全部、匠くんが
受けとめてくれた…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4291z/>

「先輩、あのね。～tearlove～」

2011年12月25日16時46分発行